

戦争で父を亡くした平松とみさんは、これまで家族に当時のことを詳しく語りませんでした。しかし、戦後80年という節目に、孫の辰規さんへその記憶を語りました。

伝えたい父のこと

私の父・大石定平は、昭和19年8月19日、台湾とフィリピンの間にあるバシー海峡で戦死しました。父は33歳という若さで、妻と5人の子どもを残し、この世を去りました。出征時には母のお腹には6カ月の赤ちゃんもいました。

当時4歳だった私は、誰かから父の死を告げられたわけではなく、小学生の兄が、学生服の胸に白木の箱を抱え家の前に立つ姿を見て、幼いながらも「父がもう帰ってこない」と悟りました。箱の中には、遺骨の代わりに、小さな石ころと白紙だけ。あの時の悲しさは今も鮮明に覚えています。

父との記憶は、ほとんどありませんが、兄たちに置いて行かれて泣いていた私をおぶって、みんなのところへ連れて行ってくれたことだけは覚えてます。今どうしても顔や声は思い出せませんが、その時の父の背中と、締めていた黒い帯の光景は今も忘れられません。

父の死後、29歳で夫を失った母

は、父が残した鮮魚店を守りながら、女手一つで私たち兄弟を育ててくれました。母親の苦勞を見て育った私たちは「支えなければ」と、みんなで力を合わせて生活してきました。当時は、周りにも同じように戦争で家族を亡くした方がたくさんいたので、自分だけではないと奮い立たせていました。しかし今、母や上の兄弟たちがこの世を去る度に浮かぶのは「もし父が生きていてくれたら、それぞれに別の人生があったのでは」という想いです。だからこそ二度と戦争のない、平和な世の中であってほしいと願わずにはいられません。



▲大石 定平 氏

語られなければ、消えてしまう

「あの日」の記憶

今、受け継ぐときです



伝える人 受け継ぐ人